第Ⅰ部 書きかえられた『昔話集』

私たちはこれらの昔話を出来るだけ純粋に捉えようとしました。[...] いかなる状況も付け加えたり美化したり修正したりはしませんでした（『昔話集』初版序文, Grimm 1986 Bd. 1 S. XVIII)。

第1章　グリム『昔話集』——手稿から最終版まで 9

第1節　グリム『昔話集』改版の歴史 . 9
第2節　グリム兄弟に昔話を提供した人々 12
第3節　誰が昔話を書きかえたのか... 16

第2章　書きかえられたもの 19

第1節　民衆らしさを増した加筆..... 21
第2節　読みものとしての体裁を整えた加筆..... 27
第3節　創作昔話の文体に近づいた加筆 31
第4節　子ども向きの本としての加筆 36

第3章　書きかえられていないもの 51

第1節　道徳に関して 52
第2節　性に関して 54
第3節　愛情に関して 54
第4節　残酷さに関して 55
第5節　神話へのまなざし..... 57

ゲッティンゲン大学のドイツ語学文学ゼミの校舎入り口にあるグリム兄弟のワッペン

第 1 章　グリム『昔話集』——手稿から最終版まで

グリム兄弟は改版の過程で昔話にさまざまな手を加えており、第 I 部ではその実例を考察するのだが、まず本章では、グリム『昔話集』の成り立ちと、改版の歴史について簡単に見ておきたい。なお、本論でグリム兄弟の昔話に言及する場合には、国際的な慣用に従い、『昔話集』第 7 版における順番を表す KHM 番号を付す。例えば、「白雪姫」は、KHM 053 である。

グリム『昔話集』は、一般的には「グリム童話」という名で親しまれているが、本論では Märchen を昔話、Volksmärchen を民話、Kunstmärchen を創作昔話と訳し分けるため、あえて『昔話集』とした。本論においては、「民話」は口承で伝えられてきたものの総称でリューティが指摘するような特徴を持ち合わせているもの (Lüthi 1992)、それに対して「創作昔話」は作者によって意識的に創られたものと捉えている[1]。

第 1 節　グリム『昔話集』改版の歴史

マールブルク大学で法律を学び始めたグリム兄弟は、恩師の法学者フリードリヒ・カール・フォン・サヴィニー (1779-1861 年) を介して、1806 年よりアヒム・フォン・アルニム (1781-1831 年) とクレメンス・ブレンターノ (1778-1842 年) による民謡 (Volkslied) 集『少年の魔法の角笛』(1806-08 年) の資料収集を手伝うようになる。これが、グリム兄弟が古くから伝わる歌謡などの伝承を集める契機となったのである。

1808 年には、そうして集めた昔話のうちの 7 篇を、ヤーコプがサヴィニーの娘ベッティーネのために送付している[2]。さらに 1810 年 10 月 25 日には、ブレンターノの要請に応えて 46 篇の昔話を送付している。というのも、ブレンターノが民謡のみならず、昔話集の出版をも予定していたからであった。ところがブレンターノはその原稿も返却せず、昔話集もいっこうに出版しなかったため、兄弟は予備に写しておいた原稿をもとに、自ら昔話集を出版する決意を固めたのであった。そうして初版第 1 巻が 1812 年に刊行されてから、『昔話集』は兄弟の存命中に第 7 版 (1857 年) まで版を重ね続けた。その『昔話集』の各版についてここで見ておきたい[3]。

1810 年手稿

グリム兄弟はブレンターノに送付した原稿の写しをもとに『昔話集』の初版第 1 巻を編

---

[1] 創作昔話の定義の困難さについては、Mayer/Tismar 1997 に詳しい。日本語では、畑沢 1995 がこの問題を扱っている。

[2] 1808 年にヤーコプがサヴィニーに送付した昔話は、ショーフの著書に収められている (Schoof 1959 S. 136ff.)。ただし、このショーフのテクストにはかなりの誤植がある (Rölleke 1986 S. 7)。

[3] 本論で扱うのは、いわゆる『大きい版』である。『小さい版』と呼ばれているのは、イギリスで好評を博した選集にならった 50 話からなるものである。グリム兄弟の弟であるエーミール・グリムが描いた挿絵が付けられている。刊行年は、初版 1825 年、第 2 版 1833 年、第 3 版 1836 年、第 4 版 1839 年、第 5 版 1841 年、第 6 版 1843 年、第 7 版 1844 年、第 8 版 1850 年、第 9 版 1853 年、第 10 版 1858 年である。第 10 版の復刻版 (Grimm 1985) をレレケが刊行している。

纂したのであるが、その写しそのものは、初版刊行後に破棄されており、残されていない。ところが、ブレンターノがグリム兄弟に返却しなかったその原稿が、1953 年に競売にかけられたブレンターノの遺品の中から発見されたのである (Grimm 1975 S. 16)。これはグリム兄弟が採話した昔話にどのように手を加えていったのかを知るための最古の資料であり、レフツ (Grimm 1926) とレレケ (Grimm 1975) によって復刻出版されている。本論ではこれを 1810 年手稿と呼び[1]、引用はレレケ版に拠る。邦訳には小澤訳 (小澤 1989) とフローチャー訳 (グリム 2001) がある。

初版 (1812/15 年)

第 1 巻は 1812 年、第 2 巻は 1815 年に刊行された。2 巻合計で 156 番[2]までの昔話が収録されている。各巻の巻末には、昔話各話についての注釈が掲載されている。本論での言及には、著者保存本をファクシミリ版として刊行したレレケ版 (Grimm 1986) を用いる。その他パンツァー版 (Grimm 1972) がある。邦訳には、吉原訳 (グリム 1997) と乾訳 (グリム 2000a) がある。

第 2 版 (1819 年)

第 2 版以降は、2 巻が同時に出版されるようになったが、注釈は切り離され、別冊の第 3 巻として 1822 年に出版された。収録されている昔話は合計 161 番までである[3]。さらに第 2 版以降は、第 2 巻の巻末に「子どものための聖者伝」が 9 話掲載されるようになった。本論での引用には、レレケ版 (Grimm 1993) を用いる。邦訳には、小澤訳 (グリム 1985a) がある。

第 3 版 (1837 年)

収録されている昔話は合計 168 番[4]まで。本論での引用にはレレケ版 (Grimm 1985a) を用いる。

第 4 版 (1840 年)

合計 178 番[5]まで。復刻版は刊行されていないため、本論での引用には、ゲッティンゲンの昔話百科事典編纂所 (Enzyklopädie des Märchens) において西口が複写したものを用いる。

第 5 版 (1843 年)

合計 194 番[6]まで。これも復刻版は刊行されていないため、本論での引用には、ゲッティ

---

[1] これはエーレンベルク修道院で見つけられたため、エーレンベルク稿とも呼ばれている。
[2] 第 1 巻は 86 番まで、第 2 巻は 70 番までである。そのうち第 1 巻の 20, 22, 32, 36, 37 番には 2 話が、39 番には 3 話が、64, 85 番には 4 話が収録されている。第 2 巻も 19 番に 3 話が収録されているため、実際の話数は 171 である。
[3] 38 番には 2 話、39, 105 番には 3 話が収録されている。聖者伝と合計すれば 175 話である。
[4] 38 番には 2 話、39, 105 番には 3 話が収録されている。聖者伝と合計すれば 182 話である。
[5] 38 番には 2 話、39, 105 番には 3 話が収録されている。聖者伝と合計すれば 192 話である。
[6] 38 番には 2 話、39, 105 番には 3 話が収録されている。聖者伝と合計すれば 208 話である。

ンゲンの昔話百科事典編纂所において西口が複写したものを用いる。

第 6 版（1850 年）

この版より昔話の最終話の番号は 200 番[1]となる。また「子どものための聖者伝」も計 10 話に増えた。復刻版は刊行されていないため、本論での引用には、ゲッティンゲンの昔話百科事典編纂所において西口が複写したものを用いる。

第 7 版（1857 年）

計 200 番[2]までの昔話が収録されている。本論で言及する場合には、レレケ版 (Grimm 1980)[3] を用いる。ただし、グリム兄弟による『注釈篇』に添えて編者レレケによる注釈が掲載されている第 3 巻は、1994 年に改訂されているため、その版 (Grimm 1994) を用いる。『昔話集』の最終版の邦訳には、野村訳 (グリム 1999f.)、金田訳 (グリム 1979)、高橋訳 (グリム 1985b)、池田訳 (グリム 2000b) などがある。『注釈篇』は翻訳されていないようだ[4]。

このように、グリム兄弟が 1810 年にブレンターノに送付した昔話の数は 46 篇であったが、初版の段階では 2 巻合計で 156 話になっている。さらに版を重ねるごとに新たに入手した昔話が追加され、昔話に付けられた番号は、第 6 版で 200 に到達したのであった。

こうして新しい話が採用される一方で、削除される話もあった。特に初版第 1 巻に収録されていた昔話のうち「およそ 4 分の 1 が、第 2 版で消え」(Tonnelat 1912 S. 5)、グリム兄弟がよりよいと判断した話と差し替えられている。改版の過程で削除された話は、レレケ版の『昔話集』第 2 巻 (Grimm 1980 Bd. 2) に収録されており、今日でも容易に読むことが出来る。

改版の過程で、昔話の題名が変わっている場合には、昔話が差し替えられたり、類話と混ぜ合わせられて (混交されて) いることが多い。そして、1810 年手稿から初版の間にとりわけ数多くの題が変更されているのだが、それは、手稿の題が単なるキーワードに過ぎないものが多かったためであり、昔話の内容が分かるような題に初版で変更されたためである[5]。

---

[1] 38 番には 2 話、39, 105 番には 3 話が収録されている。聖者伝と合計すれば 215 話である。

[2] 38, 151 番には 2 話、39, 105 番には 3 話が収録されている。聖者伝と合計すれば 216 話である。

[3] この版は、句読点などの正書法に関しては、1998 年までまで用いられていた現代の正書法に従い、編者レレケがわずかながら手を加えている。しかしその他は、非常に厳密に再現されており、本論では句読点の変更などには着目しないため、この版を用いている。

[4] ただし、小高による『昔話集』の 11 番までの 11 話の注釈の解説がある (小高 1995ff.)。

[5] フライタークは、「1812 年版では、昔話により良い題をつけることに多いに力が注がれた」(Freitag 1929 S. 93) と言及し、ショーフも、「手稿の 50 話の昔話のうち題が変更されなかったのは、5 話にすぎない」(Schoof 1959 S.177) と指摘している。その 5 話とは、Dornröschen, König Drosselbart, Vom Schreiner und Drechsler, Vom Johannes-Wassersprung und Caspar-Wassersprung, Die Wassernixe である (Schoof 1959 S. 177)。さらに Schmidt 1932 S. 26ff., Tonnelat 1912 S. 6f. も参照。

第2節　グリム兄弟に昔話を提供した人々

次にグリム兄弟がどのようにそれらの昔話を集めたかを簡単に見ておきたい。グリム兄弟は、昔話を集めるために自ら田舎をまわることはせず、たいていは提供者に自分たちのところに来てもらう形をとっていたようだ (Rölleke 1986 S. 72)。

『昔話集』の第1巻 (1812年) に収められた話は、主にマンネル家、ヴィルト家、ハッセンプフルーク家の人々から聞いたものである。どれもが裕福な家庭で、昔話を語ったのは教養のある若い女性が多かった[1]。

マンネル家

昔話提供者のフリーデリケ・マンネルは、父親がランツブルク近郊のアレンドルフの牧師であり、フリーデリケは、フランス語が堪能で、文学的教養も高かった。1807年より『少年の魔法の角笛』の収集を手伝っており、1808年11月以降にグリム兄弟に昔話を送付している。彼女が送付したということが確認されている話は6話あり、そのうちの5話[2]をグリム兄弟は『昔話集』に採用した (Rölleke 1986 S. 70)。その中には「金の子どもたち」(KHM 085) などがある。

ヴィルト家

近所で薬局を営み、グリム家と親交もあつかったヴィルト家も、初期の主要な昔話の語り手であった。ヴィルト夫人とドルトヒェン、グレートヒェン、リゼッテ、ミーの4人の娘たちが昔話を提供した。ドルトヒェンは、後に弟のヴィルヘルム・グリムと結婚している。ヴィルト家から聞いた話には、「マリアの子」(KHM 003)、「小人たち」(KHM 039) などがある[3](Rölleke 1986 S. 70)。

ハッセンプフルーク家

話の提供数が多かったのは、ハッセンプフルーク家のアマーリエ、ヤネッテ、マリー[4]の3人姉妹である。グリム兄弟は1808年以来、この姉妹と文学的なサークルで会うようになっていた。また、その息子のひとりハンス・D. L. ハッセンプフルークは、後にグリム兄弟の妹のロッテと結婚している。ハッセンプフルーク家の父親は官僚、母親はフランス系ユグノーで、家庭では主にフランス語が話されていたという。そのため、彼らが語った話には18世紀フランスの昔話との一致点があるとの指摘もなされている。マリーが語った話には、「いばら姫」(KHM 050)、「白雪姫」(KHM 053) などがある。

---

[1] 初期の語り手については、Grimm 1975 S. 390ff. にもレレケによる解説がある。また小澤 1992 S. 100ff. にも詳しい。

[2] 混交に用いられた話も含む。初版の46, 51, 63, 74, 77番である (Rölleke 1986 S. 70)。

[3] その他、初版の2, 7, 30, 59, 64I, 68番がある (Rölleke 1986 S. 70)。

[4] グリムは昔話の出自を示すメモを残しているのだが、そのメモにある「マリー」は、長い間、ヴィルト家にいた老婆マリーと誤解されていた。それが実際にはマリー・ハッセンプフルークであることを証明したのはレレケであった (Rölleke 1985 この論文には小澤による邦訳がある。谷口 1985 所収)。

クラウゼ

その他、ヨハン・フリードリヒ・クラウゼという名の退役竜騎兵曹長 (Dragonerwachtmeister) も、兵隊仲間から聞いた話や幼少期の思い出から、グリム兄弟に昔話を語っていたことが知られている。クラウゼは、語る代償としてグリム兄弟から着古した衣類をもらっていたという。彼は「3 枚の蛇の葉」(KHM 016) や「背嚢と帽子と角笛」(KHM 054) などの一部もしくは全部を語っている (Rölleke 1986 S. 74f.)。

このように、グリム兄弟が聞き書きを始めた頃の語り手は、ヴィルト家やハッセンプフルーク家の若い女性たちが主であったが、彼らから入手した話は、後にグリム兄弟によって、特に多く手が加えられたことが分かっている[1]。

3 年後に刊行された『昔話集』初版第 2 巻 (1815 年) は、そのほとんどがアウグスト・フォン・ハクストハウゼンと彼の親族、それからフェルディナント・ジーベルトとドロテーア・フィーマンによって語られたものである。初期の語り手から聞いた話とは対照的に、彼らの語った話には、後に手を加えられることがほとんどなかった[2](Rölleke 1986 S. 81)。

ハクストハウゼン

ヴェストファーレン国ベーケンドルフの男爵アウグスト・フォン・ハクストハウゼンと、彼の親戚 (その中にはドロステ＝ヒュルスホフ家の人々もいた) もグリム兄弟の昔話収集に協力していた。特にアウグストとヴェルナーの兄弟は、ヴェストファーレンの民謡の収集を計画していたこともあり、多大な協力をした (Seitz 1990 S. 63)。アウグストは、「ならずもの」(KHM 010) などを語った。

フェルディナント・ジーベルト

フェルディナント・ジーベルトは、シュヴァルム地方トライザの牧師補であった。グリム兄弟は、フリーデリケ・マンネルの仲介によって彼と知り合いになった。シュヴァルム地方で民衆の詩を体系的に収集しようとしていた彼は、1812 年以降、グリム兄弟に昔話を送付していたのである (Seitz 1990 S. 62f)。その中には、「貧乏人と金持ち」(KHM 087) などがある。

フィーマン

ドロテーア・フィーマン (フィーメニン) は、『昔話集』初版第 2 巻の序文の中で次のように紹介されている、特別な語り手である。

> そうした素晴らしい偶然の一つは、カッセル近郊にあるツヴェールン村の**農婦**と知り合えたことでした。私たちは、ここに収録した話のうちのかなりのものを彼女から

---

[1] 小澤による詳しい考察がある (小澤 1999, 谷口 1985 所収の論文など)。

[2] グリム兄弟の編集方針が徐々に固まっており、出版する段階で、ほぼ最終的な形にすることが出来た、ということも一因として考えられる。

手に入れました。よって、それらは**純粋にヘッセンの**昔話なのです。さらに、第一巻を補足する話をいくつももらいました。彼女は、まだ元気で、50 をさほど超えない年齢です。名前はフィーメニンといい、がっしりとした、感じのよい顔立ちをしていて、明るく鋭いまなざしをしています。若い頃は美しかったことでしょう。彼女はこうした古い伝承をしっかり記憶しています。 [...] 彼女は丁寧にしっかりと、そして非常に生き生きと、それに喜びを感じながら語ります。最初は全く自由に、そして望めば、もう一度ゆっくりと語ってくれるので、練習すればそれを書き取ることが出来るのです。[...] 彼女は繰り返し語っても、けっして核心部分を変えてしまうことはありません。そして、間違いに気付いた場合には、話の途中でもすぐに、自分からそれを訂正するのです[1](Grimm 1986 Bd. 2 S. IVf.)。(引用文中のゴシック部は西口による。以下同様。)

フィーマンは、家庭菜園の野菜をカッセルの町に売りに行くことはしていたが、実際には仕立て屋の妻であり、グリム兄弟が序文に記したような農婦ではなかった。加えてフィーマンの父親はユグノー系であり、フランス語を話して育っていた。そのため彼女が語ったものが「純粋にヘッセンの」昔話だということは疑問であり、『昔話集』第 2 版の序文からは、この「純粋にヘッセンの」という言葉は削除されている。

一方で、第 2 版より第 2 巻の巻頭にフィーマンの肖像画が掲載されるようになっている(本論 S. 15 参照)。これは、グリム兄弟が彼女を理想の語り手と見なしていたことを示している。そしてフィーマンは、「がちょう番の娘」(KHM 089) など多くの話を語ったが、それらには、ほとんど手が加えられていないことも分かっている[2]。

このように、ハッセンプフルーク家の母親や、フィーマンの父親がユグノー系ということもあり、ペローなどフランスの話の影響も見落とせない。だからといって、彼らの語った話の全てがフランスに由来すると考えるべきではないだろう。レレケが指摘しているように、ハッセンプフルーク家の場合、使用人たちから昔話を聞いていた場合もあるだろうし、フィーマンの場合は、父親の経営する食堂旅館に立ち寄った客からドイツの昔話を聞いて覚えたという可能性も考慮に入れる必要があるからだ (Rölleke 1986 S. 83f.)。

グリム兄弟は上述の語り手から聞き書きをしていたが、その他、後述するようなさまざまな文献からも多くの話を採用している。1815 年以降——とりわけ 1819 年以降——に新しく採用された話は、古い書物、当時の雑誌、昔話集などの文献からとられたものが主であった (Rölleke 1986 S. 86)。そのようにしてハンス・ザックス、ヴィクラム、パウリらの作品も採用したのである[3]。その結果、最終的には『昔話集』のおよそ 2 割が文献から採ら

---

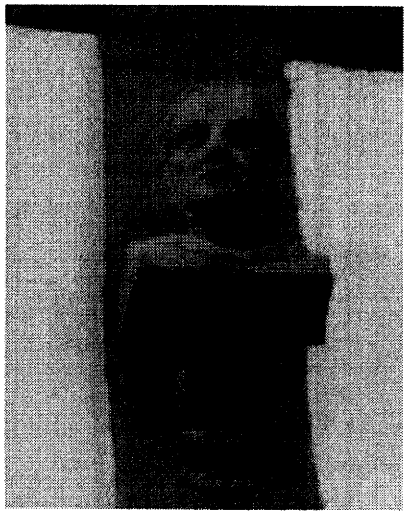
[1] グリム兄弟の著作からの翻訳は全て西口による。以降、翻訳者名を明記しない場合は、西口による翻訳である。

[2] 「がちょう番の娘」(KHM 089) の全版の比較 (日本語訳による) は小澤 1992 に、同じくフィーマンが語った「ハンスはりねずみ坊や」(KHM 108) の全版の比較は、西口 1994 にある。

[3] これらの作家については、本論第 II 部で扱う。グリム兄弟が『昔話集』の原拠としたテクストは、Rölleke 1998 に全て掲載されている。

れているという (小澤 1992 S. 184)[1]。

グリム兄弟が理想の語り手と賞賛したドロテーア・フィーマン



左は、グリム兄弟の弟ルートヴィヒが『昔話集』第 2 版のために描いた肖像画

1787-98 年にフィーマンが住んだ家

1798-1815 年にフィーマンが住んだ家

[1] 1810 年手稿の段階では、文献から採った話の占める割合は 3 割以上だった (Rölleke 1986 S. 74)。

第3節　誰が昔話を書きかえたのか

> 私たちはこれらの昔話を出来るだけ純粋に捉えようとしました。[...] いかなる状況も付け加えたり美化したり修正したりはしませんでした (Grimm 1986 Bd. 1 S. XVIII)。

グリム兄弟の編纂方針は、『昔話集』初版第1巻 (1812年) の序文にこのように示されている。しかし『昔話集』は版が重ねられるに従い、話数が増やされただけではなかった。各版のテクストを比較すれば、昔話に手が加えられていったことは明らかである。なぜ、上記のような方針を掲げながら昔話が書きかえられていったのかということは、長い間、兄弟間の相違として片付けられてきた。つまり、初版の序文で約束された「忠実な収集」は、学者肌の兄ヤーコプが目指したものであり、後の版における加筆は、詩人肌の弟ヴィルヘルムに起因するという考え方だ。

1810年手稿の段階では、ヤーコプが書きとめた昔話の方が数が多く、また手稿への書き込みもヤーコプによるものが多いことから、『昔話集』の構想と準備の段階ではヤーコプの関与が大きかったことが分かる (Bolte/Polívka 1963 Bd. 4 S. 447, Ginschel 1963 S. 131)。しかし初版第1巻でヤーコプが担当したのは、86話のうちの10ないし11話にすぎず[1]、このことは初版の段階から既にヤーコプの関与が減っていたことを示している (Ginschel 1963 S. 133, Schmidt 1932 S. 6)。さらにヤーコプはその後、『ドイツ文法』の仕事に忙殺されるようになったため、『昔話集』第2版以降の改版は、主にヴィルヘルムの手にゆだねられることとなったのだった (Schmidt 1932 S. 5)。

こうした状況を踏まえ、その後の研究においては、書きかえはヴィルヘルムが独断で行なったものであり、序文の主張はヤーコプのものだった、という解釈がフライタークやライエンを初めとした多くの研究者によってなされてきた (Freitag 1929 S. 53[2], Leyen 1958 S. 17[3])。そのことは、例えばパンツァーの次のような主張にも如実に表れている。

> ヤーコプが昔話の形を整えていたならば、もっと本質的に違ったものになっていたであろう (Panzer 1972 S. 47)。

---

[1] さらに、そのうちの6話が文献から採用したものであった (Ginschel 1963 S. 133)。

[2] (フライタークの見解) ヴィルヘルムは、初版では厳格なヤーコプの学問的な意図に合わせざるを得なかったが、後の版で昔話の様式に関する自身の理想を実現していった (Freitag 1929 S. 53)。

[3] (ライエン)「(初版の段階では) ヤーコプとヴィルヘルムはまだ共同で作業をしていた。しかし**ヤーコプはずっと厳格で**、昔話の中に実際に自然文芸 (Naturpoesie) が残されており、**それを変えてはならないと考えた。一方ヴィルヘルムは、昔話の言葉や形式やスタイルに手を加え続けた。**1819年の第2版以降は、ヴィルヘルムが単独でこの本の世話を引き受け、ヤーコプの方は何よりも『ドイツ文法』に従事していた」(Leyen 1958 S. 14)。「**ヤーコプは常に、出来るだけ厳密な記述を求めていた。**[...] そして私たちになじみの (グリムの) 昔話の表現形式は、**ヴィルヘルム・グリムによる**ものである。版を重ねるごとに、彼は言葉を磨きあげたのだ。その表現がどれだけ優雅に具象的になり、子どもらしく好ましいものになっていったかということは、明確にたどることが出来る」(Leyen 1958 S. 16)。

しかしギンシェルの研究により、昔話の扱い方に関してふたりの間に大きな差異がなかったことが知られるようになった。ギンシェルはまず、「忠実な収集」を謳う『昔話集』の序文を記したのがヤーコプではなく、ヴィルヘルムであることに注意を喚起している。その上で、ヤーコプとヴィルヘルム、それぞれの昔話の扱い方を比較して見せたのだ。

さて、グリム兄弟が聞き書きだけでなく書物からも昔話を集めていたことは既に述べた通りであるが、聞き書きしたものには1810年手稿が、そして書物には原典が存在するために、グリム兄弟がどのように原拠に手を加えたかを知ることが出来る。ギンシェルは1963年の論文にて、イタリアのバジーレの『ペンタメローネ』[1]の「蛇」(2日目第5話) をヤーコプが「ドイツの昔話風に」書きかえたものに目をつけたのだった[2]。

そうしてギンシェルがヤーコプによる手の加え方の特徴を詳しく考察したところ、それが『昔話集』の改版の過程にみられるヴィルヘルムの手法に非常によく似ていることが明らかになった。つまり、ふたりの手法には大きな相違は見られなかったのである (Ginschel 1963 S. 134ff.)[3]。

現在では、ギンシェルによるこの指摘は広く受け入れられており、兄弟の編纂方針に大差はなかったということでは見解が一致している。レレケは次のように総括している。

> 昔話のプロジェクトを実行する際に、グリム兄弟の間で意見が (大きく) 異なっていたという推測がなされた。[...] 実際には、ヴィルヘルムに向けられた (ヤーコプの) 非難は、ほとんどが注釈に関してであり、あるテクストを採用したことや、加筆したことについての叱責はほとんどない。そして、これまでに行われた (原典との) 比較文体分析からは、ヤーコプとヴィルヘルムそれぞれが再話した昔話の間に、そうした差異は見出されていない (Rölleke 1986 S. 76f.)[4]。

---

[1] バジーレに関しては、本論第Ⅲ部参照。『ペンタメローネ』を入手したヤーコプは、昔話研究にとってのこの本の重要性をすぐに見て取った (1811年11月1日付けのアルニム宛の書簡より。Steig 1970 S. 162)。グリム兄弟は『昔話集』の注釈の中でも、バジーレを頻繁に引き合いに出している。また『昔話集』初版第1巻の序文には、『ペンタメローネ』の翻訳を『昔話集』第2巻に掲載することが予告されていた。しかし実際には、ナポリ方言が難解だったため、原話を抄訳したものを1822年の『昔話集 注釈篇』(第3巻) に掲載するにとどまった。これは後の版では割愛されてしまったが、Bolte/Polívka 1963の『注釈集』第4巻に再録されている。

[2] これは1816年に雑誌 (Taschenbuch für Freunde altdeutscher Zeit und Kunst) に発表された。また、ヤーコプの『小論集』にも再録されている (J. Grimm 1965a S. 226f.)。

[3] この「蛇」の話は、『昔話集』の初版が刊行された後の1816年に発表されたものである。つまり、『昔話集』の編集方針がある程度固まった時期にヤーコプが行った再話なのである。

[4] 同じくザイプスも、ヴィルヘルムはヤーコプの意思に逆らって書きかえを行ったのだとする解釈を否定し、「1815年以降は主にヴィルヘルムが編集を行っていたことは確かであるが、1807年から1812年の間にヤーコプが編集作業の枠組みを確立しており、第1巻はほとんどをヤーコプが編集していた」(Zipes 1989 S. 12) ことを指摘している。そして「(『昔話集』の) 調子を決めたのはヤーコプであり、話をどのように変え、様式化していくかということに関しての意見は、ふたりはほとんど一致していた」(Zipes 1989 S. 11) と述べている。

さらにボティックハイマーも、「ヤーコプも、『昔話集』を拡充するためにヴィルヘルムに劣らないくらいの努力をしていた」、「『昔話集』の文体はヴィルヘルム・グリムひとりに帰するものであるが、ヤーコプ・グリムも古文書研究の際に資料を見つけると、常にそれを弟に渡していたという前提のもとに」自らの研究を行っている (Bottigheimer 1987 S. xif.)。

本論においても、以下の考察を行うにあたって、後の版で『昔話集』の改版作業を担当したのは主にヴィルヘルムであるが、編纂方針に関してはグリム兄弟の意見は一致していたという見解を前提として考察を進めていく。

次章では、『昔話集』が一体どのように書きかえられていったのかということを、先行研究を追いながら、詳しく考察していく。

ゲッティンゲンの昔話百科事典編纂所
『昔話集』の第5版と第6版を所蔵している。
『昔話集』第4版も、複写したものを所蔵している。